

現代住宅の平面構成に関する研究

第1報 序・接客空間のとられ方

◎ 正会員 岡 俊江 同 青木 正夫 同 竹下 輝和 同 磯貝 道義 同 友清 貴和  
 ※5 ※1 ※2 ※3 ※4  
 同 宮崎 信行 同 長島 洋子 同 末広 香織 同 藤田 由美  
 ※5 ※5 ※5 ※5 ※5

① はじめに

本研究は、現代住宅<sup>1)</sup>の平面構成の原理をさぐり、今後の住宅計画の指針を得ることを大きな目的としている。

座敷や応接間などの専用の接客空間をもつ住宅は、食寝分離論から公私室論に至る、所謂近代住居理論の立場からは、接客本位の平面であるとして否定されてきた。これについて、鈴木成文教授は、「...それは、座敷や応接間など設けようにも設けられない戦後の住居規模の狭さからくる問題であつたかもしれない。」と述べられている。

近年、住戸規模が拡大し、近代住居理論の立場からも、公室のあり方が再検討され、接客空間の必要性についても論じられるようになってきた。

ところで、接客空間は、何も日本に特有な存在ではなくして、諸外国にも存在するものである。そもそも接客という行為は、人間が人間たる所以であり、人間が他の動物と区別される特徴であるといえよう。従つて、又、接客空間は、人間のすまいとしての住宅が、本来、当然、備えているべきものであろう。事実、上述の接客空間に対する否定や批判とはかわりなく、接客空間を有する住宅は、厳然と存在し続けている。

以上のような視点に立つと、接客空間は、今後の住宅計画を考えていく際の1つの重要な指標になりうると考える。

本研究は、現在、供給されている住宅の平面構成の実態を、接客空間のとられ方に着目して考察し、次に住み手の側の接客空間に対する意識・要求を把握し、更に、住まい方調査を行なつて、接客空間に対する要求構造を解明することによつて、現代住宅の平面構成の原理をさぐるものである。あわせて、この過程の中で、現在も根強く残る続々間型住宅の存在理由も明らかにしたい。

本報以下3報は、接客空間のとられ方に着目して、

新築独立住宅の平面の実態を考察した報告である。

② 調査概要

全国的に組織された団体と知人の協力を得て、全国47都道府県から新築独立住宅の平面図の新聞広告を収集した。建売分譲住宅が大半を占め、一部に注文住宅もある。建設供給主体は、地元の工務店・大手不動産会社、プレファブ住宅会社等、様々である。表1-1に、調査概要を示す。

プランの集計方法は、単単位に集計し、同一プランが同一県内の異なる敷地に建設された場合は、多数であっても、1プランと数える方法をとった。又、設計変更可能な所謂フリープランや、中古住宅のプランは除外している。

なお、住まい方の明らかなないプランから生活を想定するにあたって、以下のように各室を定義した。

座敷	床の間を備えた和室
続々間座敷	座敷と隣の室が建具も含め1間以上の開口で連続している
応接間	玄関脇に設けられた洋室
だんご室	DK又はKに接続している室
連続	2室が1間以上の開口で隣接している
接続	2室が半間以上の開口で隣接している

表1-1 調査概要

県名	プラン数	延床面積	住戸延床面積	戸数	県名	プラン数	延床面積	住戸延床面積
1 北海道	223	96,46	102,25	25	25 滋賀	391	75,46	122,36
2 青森	53	97,85	128,78	25	26 京都	449	79,65	101,37
3 岩手	76	88,37	127,93	27	27 大阪	783	91,91	90,14
4 宮城	299	96,00	116,37	28	28 兵庫	461	92,41	106,66
5 秋田	70	93,91	140,05	29	29 奈良	404	98,81	117,38
6 山形	46	100,39	133,98	30	30 和歌山	122	84,20	101,35
7 福島	80	95,91	123,34	31	31 鳥取	36	85,58	125,54
8 茨城	259	84,55	103,13	32	32 島根	17	129,06	121,45
9 栃木	29	89,86	106,03	33	33 岡山	244	92,36	113,52
10 群馬	39	93,21	110,14	34	34 広島	423	90,73	109,84
11 新潟	294	81,46	89,20	35	35 山口	243	92,49	111,26
12 富山	299	94,85	91,99	36	36 徳島	67	97,85	103,06
13 石川	500	81,30	88,48	37	37 香川	82	90,68	113,84
14 福井	572	89,21	89,24	38	38 愛媛	173	86,49	104,28
15 神奈川	222	95,53	139,39	39	39 高知	15	85,47	94,28
16 新潟	149	106,18	154,16	40	40 福岡	989	90,13	101,45
17 富山	99	111,55	146,88	41	41 佐賀	98	93,62	118,37
18 石川	78	104,37	143,61	42	42 鹿児島	100	88,99	99,81
19 長野	21	88,86	118,51	43	43 熊本	109	92,53	102,62
20 長野	94	99,20	133,91	44	44 大分	212	96,12	107,15
21 岐阜	245	95,24	128,98	45	45 宮崎	125	91,83	88,40
22 愛知	231	90,90	105,85	46	46 鹿児島	51	82,98	76,72
23 三重	547	91,97	110,67	47	47 沖縄	14	77,64	73,28
24 愛三	217	98,21	108,28	48	48 全国	10519	91,51	106,16

調査期間 1982年11月上旬～12月上旬 (1ヵ月間)  
 1983年6月上旬～7月下旬 (2ヵ月間)

平家 2.3% 2階建 97.7%  
 DKを除いた居室数 5室 59.2% 4室 39.2%  
 1階2室2階3室計5室 39.2% 1階2室2階2室+4室 21.5%  
 3室 2 5 13.0% 1 3 4 10.5%

③ 接客空間のとりわけ

(1) 県別に見た接客空間のとりわけ

座敷あるいは応接間の接客室をもつプランの割合は、全国で86%にのぼっている(図1-1)

接客空間の形態からみると、座敷と次の間の2室から成る続き間座敷が5割強、一つ間座敷が4割あり、応接間のみは1%に満たない。第3報で詳述するが、応接間は座敷を設けた上で別に設けられる場合が多く、その場合、図中では、座敷の形態によって分類している。接客室をもたないプランは14%である。

県別に傾向をみていくと、続き間座敷は、南九州の各県を7割以上を占め、東北・中部地方でも高い割合を示している。一つ間座敷の多いのは、近畿圏、東海地方、そして、埼玉・千葉・神奈川の首都圏の県である。東京をはじめとする首都圏の都県は、接客室をもたないプランの多いことが特徴である。以上3タイプの接客室の形態と、その分布状況は、敷地条件との関連が予想される。

(2) 延べ床面積と接客空間のとりわけ

図1-2は、今回の収集プラン中、接客室を持つ最小規模の住宅である。総室数3室で、座敷にDKが隣接するこの平面構成では、おそらく、座敷は接客の専用室ではなく、だんらん・就寝などのいくつかの行為が重なる場となるであろう。しかし、このように小さい40㎡の住宅においても、床の間のある座敷を設けようとするのはなぜか、座敷のもつ意味、接客空間要求をさぐるのに、恰好の興味深い例である。

接客空間のとりわけ方を、延べ床面積毎にみていくと、図1-3に示すように、40㎡以上150㎡未満において、延べ床面積の小さいプランでは、接客室のある例が少なく、40㎡台10%、50㎡台15%しか接客室を持たないが、60㎡台からふえて50%を越え、70㎡台80%、80㎡台90%と増加していく。逆に、接客室のないプランは、小規模な場合に多く、面積の増加に従って減少している。このことは、ある程度の住戸規模になると、接客室を確保したい要求のあることを示しているといえよう。

接客室の形態別に見ていくと、続き間座敷では、次の間が和室のプランは100㎡未満に多く、100㎡をこえると、次の間が洋室のプランが多くとられている。一つ間座敷は小規模から大規模まで一定してとられてお

り、寸前後の割合を占めている。

以下2報では、続き間座敷・一つ間座敷・応接間の接客室をもつプランについて考察する。

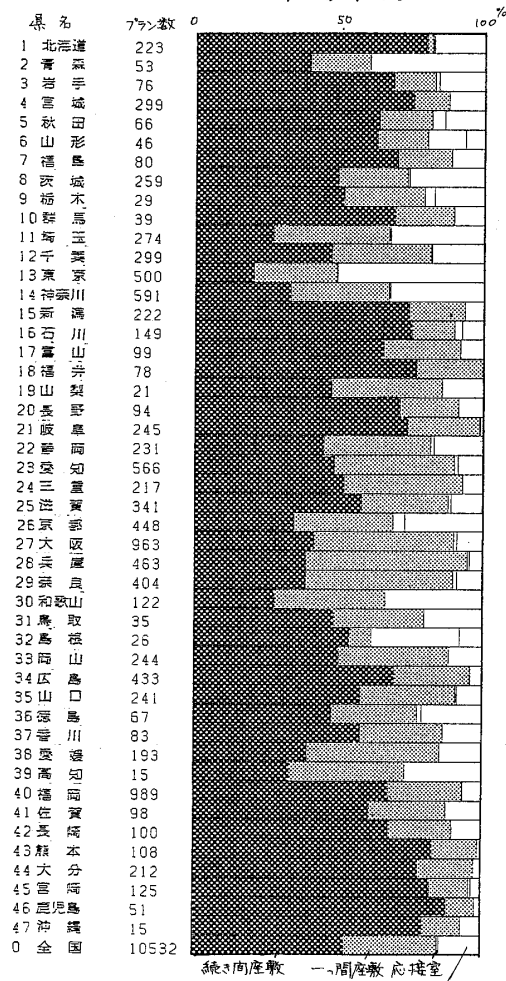


図1-1 県別に見た接客空間のとりわけ

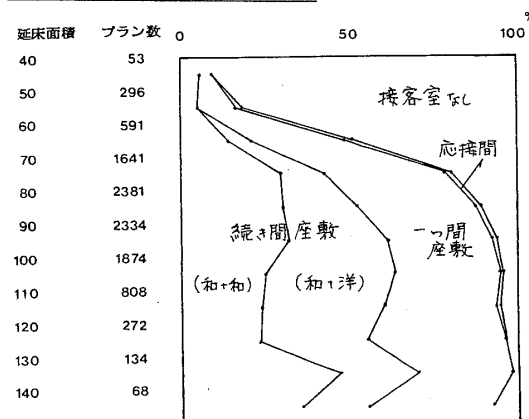
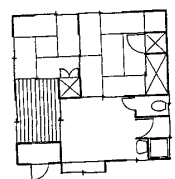


図1-2 延床面積別接客空間のとりわけ

注1) この中で現代住宅とは、「中流住宅の平面構成に関する研究(概観1982年5053~61,1983年5058~5064)」が、近代の中流住宅を対象に実的考察を行なったのに対し、現代の住宅を対象にしている、という意味で用いている。又、集合住宅とか独立住宅と区別せずに広く現代の住宅という位置づけで、用いている。

注2) 建築雑誌 vol.99, No.1219, 1989年4月号P23.



△ 茨城県、延床面積40㎡

※1 九大教授・工博 ※2 同講師 ※3 同助手 ※4 同助手・工博 ※5 同大学院生